The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第1講　現代文化を読み解くということ
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 9-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【第1部】

イントロダクション

第1講
現代文化を読み解くということ

1. この授業の目的

みなさん、おはようございます。グローバルコラボレーションセンターの福田州平です。

この講義は、「現代文化を読み解く」が講義名であり、そしてテーマです。したがって、「文化」というコトバが極めて重要になってきます。ですから、まず第一回目の授業では、「文化」というコトバに少しこだわってみたいと思います。

ですが、その前にこの講義の目的について、少しお話したいと思います。まず、私の専門は、国際関係論あるいは国際政治学といった分野になります。もっと詳しく言うと、大学院ではテロリズムについて研究をしていたので、安全保障論といわれる分野に属していました。「属していました」と、自分のことなのにちょっとおかしな言い方をしたのは、私の研究テーマが――おいおいお話することになりますが――現在ではテロリズムからはなれてしまったからです。今では、狭い意味での安全保障に関する研究はしていません。ただし、やっていることが完全に変わったのかというと、そうでもありません。「自己」（オレ）と「他者」（アイツ）の関係構築や見方をあれこれ考えるという意味では、テロリズム研究でも、多文化共生論、さらには人間の安全保障論でも、さほど変わりはないし、ある意味では一貫していると思っています。

前置きが長くなりましたが、こういった人間ということもあって、この授業は、幸か不幸か狭い意味での「国際政治学」や「国際関係論」といった内容ではありません。「国際政治学」や「国際関係論」の基本的な授業だと、まずウェストファリア体制の成立から始まって、ヴェルサイユ体制があって、国連ができてとか、理論的にはリアリズムとリベラリズムの対立があって……といったことをお話することになります。しかし、この授業はそういった内容に直接触れることはないと思います。講義内容に関連して、少し理論的なお話がでてくる程度です。また、普通、文化関係の内容を扱う講義の担当者は、人類学や社会学、あるいは文学を専門にする先生が多いと思います。しかし、残念ながら私の専門はさきほど申した通りです。ですから、「社会人類学」、「文化人類学」、「社会学」あるいは「文芸批評」の入門的な講義でもありません。ですが、こういった学問分野で展開されている概念をちょこちょこ拝借しています。

この講義では、新聞やテレビなんかで言われていることをちょっと引いて考えてみる、「常識」といわれているもの／思われているものをあれこれ考えてみる、そのための道具や考え方を紹介する、あるいは一緒に考えるといったタイプの授業をめざしています。ですから、通常の「国際政治入門」や「国際関係論入門」といった科目で教えている内容とはずいぶん異なります。つまり、現代の私たちの生活様式、思考様式、そして「常識」と呼ばれているもの、それらは立派に「文化」ですが、みなさんはそれを意識的か無意識なのかはともかく、そういうものだと、あるいはそれはとてもよいものだと「同意」してしまって、現在に至っているのかもしれない……といったことをお話しする授業です。

2. 文化について

2.1　文化の定義は難しい

さて、のっけからたいへんな問題をあつかいます。文化とは何なのでしょう。たぶん、みなさんに「文化とは何か？」とたずねたら、いろいろな回答があることでしょう。それだけ、さまざまな意味合いで使われているコトバです。音楽、映画、小説、マンガ、アニメなんかは文化に含まれることでしょうし、これらが文化というコトバを聞いてまっさきに浮かぶイメージという方も少なくないと思います。また、日本語には、文化住宅や文化鍋なんていうコトバもあります。さらには、文化放送とか、あるいは○○文化協会なんていう組織名もあります。日本史に詳しい方は、元号に「文化」（西暦1804-1817年）があったという人もいるかもしれません。

こうしてならべてみると、文化とは何なのか余計にわからなくなりそうですし、実際に一筋縄ではいかないコトバです。しかし、ある程度の意味合いを決める必要があります。なぜなら、この講義は「現代文化を読み解く」ですから、読み解くべき現代の「文化」が何なのか決めておかないと話がすすまないからです。とはいえ、文化の定義は難しそうです。せめて「文化」なるものを考えるためのヒントが必要です。そこで、ヒントになりそうな議論をご紹介してみたいと思います。

2.2　レイモンド・ウィリアムズの議論をてがかりに

レイモンド・ウィリアムズ（1921-88）という有名な批評家がいます。カルチュラル・スタディーズ[1]の始祖の一人としてよく名前があがる方です。この方の著書である『キーワード辞典』をとっかかりにして、話をはじめてみましょう。『キーワード辞典』の文化の項目には、冒頭、このようなことが書かれています。

> 英語で一番ややこしい語を二つか三つ挙げるとすれば、cultureがそのひとつとして挙げられるだろう。それはひとつには、この語自体が、ヨーロッパの言語のいくつかにまたがって、複雑な歴史的発展をとげたためでもあるが、おもな理由は、この語が現在いくつかの違った学問分野で、またいくつかの相容れない異なった思想体系において、重要な概念をさすようになっているためである（ウィリアムズ 2011: 138）。

ウィリアムズは、こうして、冒頭で文化の定義に悩む読者をさらに路頭に迷わすようなことを述べて、文化（culture）というコトバの歴史的変遷をたどっていきます。cultureが、ラテン語に由来することは、英語の授業で習った方も多いかもしれません。だからそのあたりのお話は省きます。ウィリアムズは、語源的解説にとどまらず、18世紀、19世紀のフランス語やドイツ語におけるコトバの検討、さらにはヨハン・ゴットフリート・ヘルダーやエドワード・タイラーなどの著作における文化の使われかた、語義などにも言及して、文化の用法を3つに整理します。まず、一つ目が「『知的・精神的・美学的発達の全体的な過程』をいう独立した抽象名詞」、二つ目が「『ある国民、ある時代、ある集団、あるいは人間全体の、特定の生活様式』」をさす独立名詞をあげます。これらは、ウィリアムズが語源から丹念に検証していって導きだしたものです。そして、三つ目として、「『知的、特に芸術的な実践やそこで生み出される作品』をいう独立した抽象名詞の用法」」を挙げています。ウィリアムズは、この三つ目の用法を、現在ではもっとも広く普及した用法だと指摘しています。

こうやっていろいろな意味があるコトバを一義的に定義しようとすると、複数の意味からどれか一つをとりだして、他のものを捨ててしまうということをやってしまいがちです。後ほど取り上げますが、テロリズムの定義なんか、その傾向がみられます。ウィリアムズは、「学問分野においては、概念の意味を明確にしなくてはならないのは当然のことである」（ウィリアムズ 2011: 145）と述べてはいますが、こうも指摘しています。「重要なのは複数の意味の広がりや重なりのほうである。語義のからまりあいは、議論のからまりあいを示すものであり、それは人間全体の発達と特定の生活様式との関係、またその両

1　カルチュラル・スタディーズを一言で定義するのはきわめて困難だが、それが対象とするのは、「人が普通に生きている日常生活や生活世界における様々な問題」であり、「ある社会的、政治的、文化的な問題に具体的な文脈、特定の出来事性と場所において、実践的に分析、解釈を行い、その問題解決のための方向を示すことがそこでは求められる」（上野・毛利 2000: 7）という、上野俊哉と毛利嘉孝が示したカルチュラル・スタディーズ像をここでは説明に代えて、紹介したい。

方と芸術・学問の作品・実践との関係をめぐる議論である」(ウィリアムズ 2011: 146)と。意味の広がりや重なりについての注意を喚起しているのです。『キーワード辞典』で彼が示した「語義のからまりあい」と生活様式との関係の指摘は、文化における政治を考えるうえで、重要な視点ではないかと思います。

ここで、別の論者に登場していただきましょう。第3講で詳しくお話しする予定のエドワード・サイードという比較文学者は、自らの著作では、二つの意味で「文化」を使っているといっています。一つは、「記述法とかコミュニケーションとか表象のような慣習的実践」です。もうひとつ彼が「文化」というコトバにこめようとした意味は、「洗練化と高尚化をうながす要素をふくむ概念」です。そしてマシュー・アーノルドという学者のコトバを踏まえつつ、「おのおのの社会にある……これまで知られ思考されてきたもののうち最良のもの、それの保管庫」(サイード 1998: 4)なのだといっています。この意味での文化は、教養とイコールであって、それを通じて自分たちの社会やら伝統やらを知るわけです。それは、教養なるものを身につけた「オレたち」と身についてない「アイツら」を区別することにつながり、サイードの表現をつかえば、「アイデンティティの源泉」となります。この意味が攻撃的な色彩を帯びるようになると、非常に原理主義的な排外主義となってでてきます。こうなると、通俗的に言われている「教養」そのものの内容も結構疑ってかからないといけないのかもしれません。それはともかく、サイードが指摘する第二の意味の文化で繰り広げられることは、さまざまな主張、ものの見方やイデオロギーなどのぶつかり合い、絡まりあいの政治の場そのものです。

ピーター・ブルッカーというカルチュラル・スタディーズの研究者は、「文化の様々な意味は、いまや様々なメディアや言説を交差する、一定の意味付与的実践の必然的な表現として理解されるようになっている」(ブルッカー 2003: 203)と指摘しています。ウィリアムズやサイードの議論を含めて考えると、一定の意味付与的実践の必然的な表現のなりたち、別の実践との対立、どのような意図でそうした実践が生まれるか、あるいは誰がその実践を行っているのか、そしてその意味付与的実践がどう受け入れられているのかなどなどを考えていくこと、こうしたことが、文化を読み解くということなのではないかと思います。

2.3　平野健一郎の「国際文化論」

国際関係論の研究で、「国際文化論」といわれている分野があります。その代表的な論者の平野健一郎先生の議論をここでご紹介したいと思います。この国際文化論という分野は、主に日本で発展してきたといわれています。私は大学院生のころに、国際文化論の存在を知ったのですが、そのときは、「え、国際関係論にこんなアプローチがあるの！」と驚いたものでした。といいますのも、私が当時もっていた国際関係論のイメージは、国家というものが国際関係の主役であり、国家と国家の間での経済とか安全保障といったイシュー、あるいは国際機関の国際社会における役割、世界的な秩序の問題なんかを扱うものであって、文化に関することは社会学とか人類学とか、別の学問がやることだと思っていたからです。

平野先生の国際文化論は、国際関係を文化から見ようとするアプローチです。平野先生の著作、『国際文化論』での議論を、ちょっと乱暴な形ですが簡単にご紹介したいと思います。まず、国際関係を文化的な関係としてみること、これを平野先生は「動く国際関係論」だとおっしゃっています。これに対置されるのが、「動かない国際関係論」です。前者は、「文化要素が国境を越えて動くことから始まる文化触変という現象についての考察」であって、「国境を越えて動く人々が作り出す国際関係」を考えていこうとする議論です(平野 2000: iii)。文化触変とは、acculturationというコトバに平野先生があてた訳語です。漢字から読み取れるとおり、文化間の接触による文化の変化を意味するコトバです。一方、後者の「動かない国際関係論」ですが、これは私が大学院生のころぼんやりとい描いていた国際関係論のイメージ、つまり動くことがない国家(マンガでは『沈黙の艦隊』という原子力潜水艦が独立国家を称する作品もありますが)を主体にして、国家と国家の関係をもっぱら考える議論です。

動く国際関係論としての国際文化論では、「国際関係を国境を越えるすべての行為が作り出す関係と捉え、個人もその行為の主体となりうると考える立場に連動して、文化を広く捉える」(平野 2000: 2)立場をとります。伝統的な国際関係論とは一味も二味も違った立場ですが、その分、文化ははっきりとした形のあるものではないので、見るべき、確固たるポイントがしっかりしていないと、掴まえ所のない議論になってしまいます。そこで、平野先生は、「文化の普遍性」、「国境はなくなっていないという事実」、「多様な行為主体が国際関係に参加しているという事実」、「文化の個別性」、さらに「歴史的考察という確固とした拠りどころ」が重要だと指摘しています(平野 2000: 3)。

ここから、いよいよ文化の定義の議論に入ってきます。まず、平野先生は、文化には普遍的な性格と個別的な性格の二面があると指摘します。人類は、二足歩行を始め、火や道具を使って自分の非力さを補う、これが文化の始まりであって、他の動物とは区別されうる点だ——といった場合、これは人類全般に当てはまることですから、普遍的な性格の意味での文化となります。こうして、人間は、文化によって自らの非力さを補うことで周囲の環境に対応するのだけれども、環境は時と場所によって異なりますし、そうなるとそれへの対応も異なってくる。こうなると、文化には個別性があるといえるわけです。

国際関係を文化で見る際には、この両方の性格を踏まえたうえでなければならない。では、そうなるとどのように文化を定義したらよいのか。平野先生は、人類学者のクライド・クラックホーンの文化の定義を煮詰めていって、「生きるための工夫（designs for living）」と、簡潔な定義にたどり着いています（平野 2000: 10-11）。

そして、平野先生は、人類学者の石田英一郎先生が提示した文化の構造を引きながら、①全体が部分を構成し、全体は部分の総和以上の特性を持ち、②境界をもち、③部分がそれぞれ特有の機能をもち、全体に構造があり、④平衡回復的（ホメオスタティック）[2]で、安定性を有するシステムとして、文化を捉えています。このうち、第2点目では、個々の文化の境界を引くことについて論及されています。その根拠は薄弱ということはわかっている。だけど、文化をシステムとして捉える以上、一つの文化全体を環境や他の文化すべてと区切る境界が設定されねばならず、だから、国際社会の文化的関係を理解するためには恣意的に境界を引くことが必要なんだとおっしゃっています。また、同じくシステム論の観点から、文化要素には多機能性と多義性があると考えるのが必要なのだとおっしゃっています（平野 2000: 11-15）。

平野先生の議論は、整理されていて理論的に非常に美しいのですが、ただどうしても、個々の文化に境界を引くことを必要とする部分にはひっかかりを感じます。といいますのも、確かにシステム論的に国際関係を文化で捉えるという意味ではいいのかもしれませんが、恣意的に境界を引くという行為そのものはきわめて政治的ではないかと感じるのです。その引き方によっては、きわめて深刻な問題につながることも考えられます。もっというと、境界の引き方は幾通りもあるでしょう。そうした、文化の境界の引き方の実践そのものこそ、「文化」として読み解くべき対象であり、もっといえば後ほど詳しくお話しするサイードの提起する問題点にもつながるのではないか、そう私自身は思ってしまいます。

2.4　文と質の議論

さて、これまで文化の定義について、いくつかの議論をご紹介しました。しかし、ウィリアムズも平野先生も、cultureのお話を念頭に置かれています。cultureに相当する日本語は、いうまでもなく文化ですが、これは漢語です。では、漢語としての文化はどのような意味なのでしょうか。

そこで、『漢字源』という漢和辞典で文化を引いてみました。すると、以下のように三つの意味が掲載されていました。

①文による感化。武力が刑罰などの権力を用いず、学問・教育によって人民を導くこと。〔⇒説苑〕
②学芸・諸文物が進歩し、世の中が発展すること。文明開化。
③人間が理想の実現のために果たしてきた精神的な活動とその所産の総称。学問・芸術・政治・法律などをさす。▷ドイツ語Kulturの訳語。

③の意味については、これまでの議論と重なります。②については、文明開化の略語としての文化の意味です。そして、①の意味については、これまでの議論では出てこなかった観点だと思います。ここでは、これまでとは別の観点からの視角を付け加える意味で、①の意味をもう少し詳しく検討したいと思います。

①の括弧のなかに、『説苑（ぜいえん）』という書物が記されています。前漢に活躍した儒学者の劉向（りゅうきょう）の作品です。この『説苑』という書物は、皇帝の教育用につくられた故事説話集です。その執筆動機は、当時王室を牛耳っていた王氏一族に対して、劉向が行っていた漢王朝永続のための政治活動が絡んでいるといわれています。劉向という人は、波乱万丈の生涯を送ったようですが、ここではそれに触れません。劉向の生涯を詳しく知りたい方は、池田秀三さんが書いた『知恵の花園　説苑』の解説部を読んでください。

さて、『説苑』の第15巻「指武（しいぶ）」に、こんな文章があります。

> 聖人之治天下也、先文德而後武力。凡武之興為不服也。文化不改、然後加誅。夫下愚不移、純德之所不能化而後武力加焉。（日本語訳：聖人が天下を治める場合、学問文教の徳をまずはじめに施し、武力は後にする。そもそも武力を行使するのは相手が心服しないからである。学徳によって教化をしても、相手が悪い行を改めない場合はそこではじめて武力を使って討伐を行うのである。いったい至って愚かな者は、どんなに教化しても向上しないものである。純粋な徳で教化することができなくなってその後にはじめて武力を使うのである。）（高木 1969: 232）※傍点筆者

ここに「文化」というコトバが登場し、①の意味で使われています。物理的な力の行使の前に、まずは、文で人びとを感化せよといっているわけです。では、文とは何か。文は、もともと綺麗な模様の意味です。いまでも、文は「あや」とも読み、模様の意味が残っていますよね。文に対するコトバが、質です。自然のままの状態が「質」であり、それに人の手が加わると「文」になります。

2　ホメオスタティックとは、恒常的に安定した状態を保つこと。

ここで、高島俊男さんの議論に基づいて、文と質のお話をすすめていきたいと思います（高島 2004: 90-91）。まず、衣服を考えてみてください。本来、衣服は人間の体を保護すればそれで用は足りるわけです。何も模様がない衣服を「質」と考えてください。質さえあれば、問題はないはずで、着てもおかしくないはず。だけど、少なくともこの講義にでている方々の多くの衣服は、模様がかかれたり、絵がかかれていたり、カラフルだったり、あるいはヒラヒラなんかがついたりしていて、綺麗に見栄えよくなるよう手が加えられています。このようにデザインが加えられること、これが「文」です。文には実用性がありません。しかし、儒家は質だけだと、人間は動物とあんまり変わらなくなると考えて、質だけでなく、文も重要だと考えます。儒家とは、むちゃくちゃ乱暴に言えば、冠婚葬祭といった儀式の専門家です。儀式こそ、社会にほどこされた模様、文です。儀式には、実用性はありません。実質のない、完全な「文」の世界です。しかし、儒家はこれが大事だと考え、人間が「文」を備えた生活ができるように「化」していかねばならないと考えたそうです。これが文化となります。

となると、こんなことはいえないでしょうか。私たちは生活をしていくうえで、いろいろな考え方や立ち振る舞い方を、さまざまな形を通じていつのまにか身につけています。その考え方や立ち振る舞い方のすべてに、実用性や実質はないでしょう。文です。こうして、私たちは、文を備えた生活を送っている。だけど、この生活のなかでの考えや行動は、そのように振舞うように「化されている」のかもしれない……と。ここまでくると、後の講義でちょっと触れるミシェル・フーコーの議論にもつながってくることでしょう。いずれにせよ、現代の文化を読み解く際には、こうしたことを考えて検討すべきと思います。

3.「当たり前」を批判的に捉える

長々と文化をめぐって抽象的なお話をしてきました。ここらへんでちょっとまとめたいと思います。まず、文化の一義的な定義は、難しいですし、むしろしないほうがいいでしょう。それよりも、さまざまな意味が絡み合っているということを重視したほうがよい。文学、映画、マンガ、あるいは研究論文、さらにはフォーマル／インフォーマルな教育などなど、実質はともかく、いろいろな意味を付与する実践があって、それらがお互いに絡まりあっている。時には対立しているかもしれない。こうした絡み合いのなかに、考えるべき対象がある。また、文化の意味の絡まりあいは、私たちが日常生活を送るなかでも生じているし、このご時勢、国境を簡単に越えてしまうこともある。他方では、ある種の意味付与の力が、私たちの身体や精神活動などにすら及んでいる。つまり、私たちの行動や考え方が、ある一定の型にはまるよう「化されている」かもしれないと……。

こうしたお話は、残念ながら、文化というコトバについて、スパッと明快な定義を与えてくれません。明快なこと、わかりやすいこと、これらは、とてもいいことです。しかし、かならずしも良いことばかりではありません。時としては、非常に重要なことをそぎ落としてしまうことだってあるのです。そもそも、世の中、そんなにわかりやすく単純だったら、社会問題の解決なんてきわめてシンプルかつ簡単です。実際、そうではないから、研究者や実務家の人たちが非常に苦労しています。だけど、人びとは、複雑なものから目をそむけて、あまりにもわかりやすさを求めています。そして、そのあまりにシンプルかつわかりやすい社会像を実現すべく、政策としてやってみたら、もっととんでもない状況が出現したなんてこともあります。それはともかく、これまでの話は、文化の明快な定義の代わりに、文化という日常生活にあふれているものについての見方、読み解き方のヒントを、今回の講義では、少しだけですがお示ししたということです。

しかし、これだけだと、この講義のなかで文化がどのような意味でつかわれているのか、不明確だと思われる方もいらっしゃると思います。これまでの議論を踏まえて、強引ですが、「ある特定集団のアイデンティティの源ともなりえるような、生活を送る上での工夫であり、かつ私たちの生活での振舞いや思考をある一定の型へ化すもの」とでも定義しておきます。

本講義では、この定義の中でも特に「私たちの生活での振舞いや思考をある一定の型へ化す」部分に注目しています。どのように私たちが「化されているのか」、そしてこれまで「化されてきた」ものとは違った、新たな方向はどこにあるのかについてのお話が主となります。しかし、「多文化共生」のお話も少しだけします。多文化共生でいうところの「文化」は、「ある特定集団のアイデンティティの源ともなりえるような、生活を送る上での工夫」の意味が強くなってくることでしょう。すでにお話しましたように、文化にはいろいろな意味が重なっていることが重要です。したがって、厳密には、強引にまとめた文化の定義一本やりで考えていくことは難しく、さまざまな意味が重なっていることを申し添えておきます。

この講義の冒頭で、この講義では、「常識」といわれているもの／思われているものをあれこれ考えてみるのだと申しました。当たり前のことを、批判的に捉えるために参考となる講義にしたいと思っています。「批判的」というコトバを何気なく使ってしまいましたが、誤解されそうなので、ちょっと説明がいるかもしれません。何かについての否定的な評価、あるいは攻撃としての「批判」の意味ではなく、ここでは、「よ〜く考えてみる」といったニュアンスです。

そのためには、これまで関心のなかった考え方やものの見方をも取り入れることで、三角測量的に世の中――この講義で文化として捉えているもの――を見ていくことが必要になってくると思います。

4. お題

次回は、具体的な事例をとりあげて検討したいと思っています。そのための参考にしたいので、みなさんにアンケートをとりたいと思います。ここ最近、「日本の若者は内向きだ」と、メディアが取り上げたり、評論家が指摘しています。日本の若者があまり海外に行きたがらないといわれているのです。こうした「若者内向き論」について、皆さんはどう思うのかについて、長文でなくて結構ですから、お答えください。時間は10分ほど差し上げます。

書けましたか？　それでは、第1回目の講義はこれで終わりです。おつかれさまでした。

引用文献

ウィリアムズ、レイモンド
2011　『[完訳]キーワード事典』椎名美和ほか訳、平凡社。
上野俊哉・毛利嘉孝
2000　『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房。
サイード、エドワード・W
1998　『文化と帝国主義1』大橋洋一訳、みすず書房。
高木友之助
1969　『説苑』明徳出版社。
高島俊男
2004　『中国の大盗賊・完全版』講談社。
平野健一郎
2000　『国際文化論』東京大学出版会。
ブルッカー、ピーター
2003　『文化理論用語集　カルチュラルスタディーズ+』有本健・本橋哲也訳、新曜社。